

武蔵野日曜集会

開眼！

——ヨハネ伝第9章1～41節——

1984年9月9日（武蔵野）

小池辰雄

神の業の頭れん為 ただ一つの事を知る 神は御意をおこなう人に聴き給う エン・クリスト
 ならば何でもできる 聖霊を受ける場は平伏しの場 無の光 決定的な瞬間を捕まえなければ
 ダメ

【ヨハネ9】

1 イエス途往くとき、生まれながらの盲人を見給いたれば、2 弟子たち問い
 て言う『ラビ、この人の盲目にて生まれしは、誰の罪によるぞ、己のか、親
 のか』3 イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に
 神の業の頭れん為なり。4 我を遣し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可
 らず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能わず。5 われ世における間は世の光
 なり』6 かく言いて地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言い
 給う、7 『ゆきてシロアム（称けば遣されたる者）の池にて洗え』 乃ちゆき
 て洗いたれば、見ゆることを得て帰れり。8 ここに隣人および前に彼の乞食
 なるを見し者ども言う『この人は坐して物乞いいたるにあらずや』9 或人は
 『夫なり』といい、或人は『否、ただ似たるなり』という。かの者『われは夫
 なり』と言いたれば、10 人々いう『さらば汝の目は如何にして開きたるか』
 11 答う『イエスという人、泥をつくり我が目に塗りて言う「シロアムに往き
 て洗え」と、乃ち往きて洗いたれば、物見ることが得たり』12 彼ら『その人
 は何処に居るか』と言えは『知らず』と答う。

13 人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。14 イエスの
 泥をつくりて其の人の目をあけし日は安息日なりき。15 パリサイ人らも亦い
 かにして物見ることが得しかと問いたれば、彼いう『かの人わが目に泥をぬり、
 我これを洗いて見ゆることを得たり』16 パリサイ人の中なる或人は『かの人
 安息日を守らぬ故に、神より出でし者にあらず』と言ひ、或人は『罪ある人
 いかで斯る徴をなし得んや』と言ひて互に相争いたり。17 爰にまた盲目なり
 し人に言う『なんじの目をあけしに因り、汝は彼に就きて如何にいうか』彼
 いう『預言者なり』18 ユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるようになりしこと



を未だ信ぜずして、目の開きたる人の両親を呼び、¹⁹ 問いて言う『これは盲目にて生まれしと言う汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるか』²⁰ 両親こたえて言う『かれの我が子なることと盲目にて生まれたる事とを知る。²¹ されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問え、年長けたれば自ら己がことを語らん』²² 両親のかく言いは、ユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら相議りて『若しイエスをキリストと言ひ顕す者あらば、除名すべし』と定めたるに因る。²³ 両親の『かれ年長けたれば彼に問え』と云えるは、此の故なり。²⁴ かれら盲目なりし人を再び呼びて言う『神に栄光を帰せよ、我等はかの人の罪人たるを知る』²⁵ 答う『かれ罪人なるか、我は知らず、ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり』²⁶ 彼ら言う『かれは汝に何をなししか、如何にして目をあけしか』²⁷ 答う『われ既に汝らに告げたれど聴かざりき。何ぞまた聴かんとするか、汝らもその弟子とならんことを望むか』²⁸ かれら罵りて言う『なんじは其の弟子なり、我等はモーセの弟子なり。』²⁹ モーセに神の語り給いしことを知れど、此の人の何処よりかを知らず』³⁰ 答えて言う『その何処よりかを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。³¹ 神は罪人に聴き給わねど、敬虔にして御意をおこなう人に聴き給うことを我らは知る。』³² 世の太初より、盲目にて生まれし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。³³ かの人もし神より出でずば、何事をも為し得ざらん』³⁴ かれら答えて『なんじ全く罪のうち生まれながら、我らを教うるか』と言ひて、遂に彼を追ひ出せり。

³⁵ イエスその追ひ出されしことを聞き、彼に逢いて言ひ給う『なんじ人の子を信ずるか』³⁶ 答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』³⁷ イエス言ひ給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』³⁸ 爰に、かれ『主よ、我は信ず』といて拝せり。³⁹ イエス言ひ給う『われ審判の為此の世に来れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん為なり』⁴⁰ パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言う『我らも盲目なるか』⁴¹ イエス言ひ給う『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、然れど見ゆと言う汝らの罪は遺れり』

● 神の業の顕れん為

9章は非常に特色あるところです。生まれながらの盲人が目を開けられた。まあ大変な方です、キリストという方は。

1 イエス途往くとき、生まれながらの盲人を見給いたれば、² 弟子たち問ひ



て言う『ラビ、

「ラビ」というのは非常に尊敬した言い方です。

この人の盲目にて生まれしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか』

弟子たちがそう聞いた。大体、身体的欠陥というものは罪によるというような判断が旧約では多い。その罪は子にも孫にも伝わると、モーセの十誡のあとの方にも書いてありますが。また、恵みも伝わるといったようなことで、そういった因果応報的な考えは、仏教にもユダヤ教にもあるわけです。

³ イエスが答へ給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、どつちでもない。

ただ彼の上に神の業の頭れん為なり。

もう、キリストはこうやって答えられるときに、まだ目を開けない前にちゃんと目が開くことを見ておられる。もう盲者を見た瞬間にキリストはそういう現実に入るんでしょね。

「どつちでもない。神さまの栄光が頭れるためだ」

と。この盲人の魂のすじがちゃんとキリストには見えている。魂のすじが、質が。

⁴ 我を遣し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可からず。

「我ら」と言ったのは、この弟子を含めて仰った。「昼の間」というのはキリストが地上にある間。

「私が地上にある間は私の光が射しているよ。居なくなったら、射さなくなるよ」

と。ただし今度は、聖霊の光になりますけれどもね。「なさざる可からず」とは、「しないではいられない」ということで、強いです、この「べからず」は、「必ずする」ということ。ギリシア語で「デイ」という字で、新約聖書に百何十回か出ている。

夜きたらん、その時は誰も働くこと能わず。

ことに昔の話ですから、電気なんかありませんから、日没と共に暗くなるわけだ。本当に自然環境でお天道さんと一緒に暮らしているような世界ですからね。それは別に油の灯火はありませんでしたけれども。

⁵ われ世における間は世の光なり』

「私は世の光だ」

と。黙示録の世界にいくと、キリストが光だと書いてある。

「神さまとキリストが光で、日月の照らすを要せず」

と書いてある。

⁶ かく言いて地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言い給う、

⁷ 『ゆきてシロアム（称けば遣されたる者）の池にて洗え』乃ちゆきて洗いたれば、見ゆることを得て帰り。

えらく簡単に書いてあるね。簡単だけれども、大変な内容です。「地に唾し、唾にて泥をつ



くり」と。キリストの唾には——キリストの息でも唾でも全部——その中には霊質があります。普通の唾とは違うんだ。霊的な生命が通っている唾ですから。これを塗った泥は霊化されて、作用を持っている。復活のキリストが息を吹きかけて、

「聖霊を受けよ」

なんて仰ったでしょ。

今なお生きてありたもうキリストの霊気に触れなかつたら、しょうがないんです、信仰なんて言ったってね。今のキリスト教界で一番欠けているのは霊的人物なんです。あなたは霊的人物にならなかつたらダメだよ。聖霊の人、ということですよ。

「聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

というパウロのローマ書8章9節の言葉をしっかりと身に感銘してください。キリスト者にあらずるキリスト者がいっぱいいる。悪いとは言わないよ。悪いとは言わないけれども、パウロが言う水準のキリスト者は本当に少ない。キルケゴールが

「天才よりもクリスチャンは少ない」

と言ったのはその角度です。

「シロアム」というのは「遣わされたる者」ということ。我々もキリストに遣わされたる者です。あなた方は、「クリスチャン」なんて言わないで、「シロアム」と言った方がいいよ。「私はシロアムです」と。「遣わされたる者」という不思議な名前の池です。「ベテスダ」というのもあったね。あそこへ行くとみんな治るとか言って。ヨハネ伝5章に出ていたでしょ。38年の持病の人を治してやった。キリスト自身がベテスダの池であり、キリスト自身がシロアムの池なんだ。洗ったならば、見えることを得て帰ったという。

●ただ一つの事を知る

8ここに隣人および前に彼の乞食なるを見し者ども言う

何もできないから、ちょうどあの生まれつきの跛者がやはり乞食をしましたね。使徒行伝の4章。

『この人は坐して物を乞いたるにあらずや』⁹或人は『夫なり』⁹といい、或人

は『否、ただ似たるなり』⁹という。

全くその問答をそのまま書いてあるね。

かの者『われは夫なり』⁹と言いたれば、

「私ですよ」と答えた。「われはそれなり」と。

10人々いう『さらば汝の目は如何にして開きたるか』

お前さんの目はどうして開いたんだねと。

11答う『イエスという人、泥をつくり我が目に塗りて言う「シロアムに往きて洗え」と、乃ち往きて洗いたれば、物見ることを得たり』¹²彼ら『その人



「は何処に居るか」と言えば『知らず』と答う。
非常に劇ですね、全く。

13 人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許もとに連れきたる。

相変わらず、いつもパリサイ人に何か尋ねるんだね。ユダヤ教の権威があるものだから。

14 イエスの泥をつくりて其の人の目をあけし日は安息日なりき。

わざわざパリサイ人に聞くわけだ。安息日に何かやつてはいけないというわけだからね。このことは時々出てきます。ところが、イエスはその安息日を破っているわけだ。

15 パリサイ人らも亦いかにして物見ることを得しかと問いたれば、

同じことを答えた。

彼いう『かの人わが目に泥をぬり、我これを洗いて見ゆることを得たり』

16 パリサイ人の中なる或人は『かの人、安息日を守らぬ故に、神より出でし

者にあらず』と言ひ、

安息日を守らないような者は神から出ているのではないと。我々が安息日を守っているのは律法で守っているのではない。やむにやまれずして我々は守っている。ユダヤ教とは違う。

或人は『罪ある人いかで斯る徴をなし得んや』

「罪ある者」とは即ち、律法を守らない者のこと。律法を破るような者がどうしてこんなことが出来るかと。

と言ひて互に相争いたり。

口論しているんだ。

17 爰にまた盲目なりし人に言う『なんじの目をあけしに因り、汝は彼に就き

て如何にいうか』

どう思うかというわけだ。そうすると、この盲人であった人が、

彼いう『預言者なり』

あれは預言者だと。サマリヤの女がキリストとの会話で、「預言者を見た」というようなことを言ったでしょ。預言者というのは旧約の最高の霊的な人物ですからね。

18 ユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるようになりしことを未だ信ぜずして、

それはとても信じられないですよ、こんなことは。

目の開きたる人の両親を呼び、¹⁹ 問いて言う『これは盲目にて生まれしと言

う汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるか』²⁰ 両親こたえて言う『か

れの我が子なることと盲目にて生まれたる事を知る。²¹ されど今いかにし

て見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問え、

「年か長けたれば自ら己がことを語らん』

あまり詳しく言うとは、またパリサイ根性からやつつけられるから、適当に答えた。「私たちが言うことはない」と言つて、うまく逃げてしまった。



22 両親のかく言いしは、ユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら相議りて『若しイエスをキリストと言ひ顕す者あらば、除名すべし』と定めたるに因る。

シナゴークには来れなくなる。

23 両親の『かれ年長けたれば彼に問え』と云えるは、此の故なり。

なかなか詳しく書いてあるね。

24 かれら盲目なりし人を再び呼びて言う『神に栄光を帰せよ、

なんて、ちよつと体裁のいいようなことを言っている。

我等はかの人の罪人たるを知る』

というのは、安息日を守らないから、あれは罪びとだと。だから、矛盾しているんだ、「神に栄光を帰せよ」なんて言ってるね。

25 答う『かれ罪人なるか、我は知らず、

この盲人は非常に率直な魂だから、「そんなことは知らん」と。

ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり』

この25節は大事な言葉です。この事実をいかんともしがたいではないかと。盲人が目明きになった。暗黒の世界から白明の世界に変わった。この事実は誰よりも自分がかつきりと、誰が何と言おうとこれは事実であると。奇蹟的な事実です。

●神は御意をおこなう人に聴き給つ

26 彼ら言う『かれは汝に何をなししか、如何にして目をあけしか』27 答う『われ既に汝らに告げたれど聴かざりき。何ぞまた聴かんとするか、汝らもその

弟子とならんことを望むか』

これはおもしろいね。やつつけられてしまった、このパリサイは。そんなに聞きたいのは弟子になりたいと思っているのかと。

28 かれら罵りて言う

そう言われたものだから、今度は怒ってしまって、

『なんじは其の弟子なり、我等はモーセの弟子なり。』

私たちは律法の弟子であると。

29 モーセに神の語り給いしことを知れど、此の人の何処よりかを知らず』

ところが、もう前にキリストはこう言っているんです。8章58節、

『58 イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生まれいでぬ前

より我は在るなり』(ヨハネ8・58)

という。モーセどころのさわぎではない。

「アブラハムの生まれぬ先から私はもう居たんだよ。お前たちよりかずつと昔から



神さまと一緒に居たんだ」

と。まあ大変なことですね、

「アブラハムより前に我は在るなり」

なんていう言葉は。だから、もう永遠の実在です、世の末までも。

30 答えて言う『その何処よりかを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。』³¹ 神は罪人に聴き給わねど、敬虔にして御意をおこなう人に聴き給うことを我らは知る。

これの方がはるかに上の言葉です。「怪しき事だ」と。

「お前たちはモーセ、モーセと言うけれども、律法の世界ではなくて

私に言わせればもうひとつ言いたいことは、預言者を見ろ、イザヤ書を見ろと、

イザヤ書を忘れてるか」

と、この盲人は言つて差し支えなかった。それはイザヤ書35章です。5節、

「⁵そのとき聾者の目はひらけ聾者の耳はあくことを得べし。⁶そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり、唾者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、沙漠に川ながるべければなり。」(イザヤ35・5～6)

まあイザヤ書35章というのは旧約で一番輝かしいところの一つ、あるいは最高と言つてもいいかもしれません。

「敬虔にして御意を行う者」

と。キリストは正に御意を行つて自分の意を行わなかった。徹底的に神の御意に従つて、それを実行した。御意を100%に聴くと力が来るんです。だから、できるんです。「御意を成させ給え」なんて言つて傍観しているのではないのだから。自分を投げ出しているんだ。「どうぞ、お使いください」と。そうすると、上からグーツと来るわけです。

これが本当の自由の世界です。奴隷意志なんです、ルターが言っている通り。奴隷意志が本当の自由意志になる。エラスムスの人文的な自由意志論は相対的な道徳哲学では真理ですけれども、もうひとつ次元の高い宗教の世界になると、それではダメなんです。それはルターが言ったとおり。ルターも人文主義から福音の方へ展開したんだから。

内村先生もそっちの方だね。十字架に降参した方だ。けれども、先生はいつまでたつても、「十字架、十字架」と仰つて——それはもちろん「聖霊」についても言つてますよ、仰つている素晴らしい言葉もあるけれども——惜しかったね、その点では。内村先生は聖霊の火花は散っているんだよな。でなかったら、あれだけの文章は書けない。けれども、火花だけだ。パウロあたりへいくと、常燃の炎の世界です。

皆さんね、生まれつきの才能だとか、体質だとか、性格だとか、そんなことは問題じゃないんですよ、本当に聖霊を受けると。



●エン・クリストならば何でもできる

32 世の太初はじめより、盲目にて生まれし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。はつきり言ったね。

33 かの人もし神より出でずば、何事も為し得ざらん』
31、32、33節は非常に大事な言葉です。

「かの人もし神より出でずば、何事も為し能わず」

「イエスという人は何だかしらんけれども、神さまから出てこなければ、何事もできない。その代わり本当に神さまから出てきたから、未だかつてしないことをしたわけだ」

と、こういうわけだ。

水の上を渡ったりするんだもの。火渡りよりか水渡りの方が難しい。未だかつて水渡りをしたクリスチャンはこの世界に一人もない。ガリラヤ湖上をキリストのように渡った人はいない。それはできないよ、罪びとには。神の子でなければ。けれども、罪びとでも、二、三步はできた。ペテロが。ところが、キリストを百%に見ていなかったものだから、波と風を見たものだから、グーツと沈みかかった。SOSという。キリストが捕まえて、舟の上に乗つけてやった。

「信仰うすき者よ、なんぞ懼おそれるか。我なり、懼るな」

と。皆さん、いろんなことのでつくわしたとき、

「我なり、懼るな」

というキリストの御声を聴かなくては。「御声を聴かなくては」と言ったって、何か神秘的なことだと思っただら困る。御声はちゃんと来ているんです。そのことに気がつかなくては。我なり。懼るな」と、いついかなる時も。俄然、力が来ます。

「どうも、私の信仰は、まだ私の祈りは足りないのよ」

なんて、そんなことではないよ。投げ込みが足りないんだ。全身で投げかけていないから。本当にぶつ倒れていないから。「投げかけ」と「ぶつ倒れ」は同じことですよ。キリストのみ腕の中に。

夜はキリストのみ腕を枕として寝てください。必ず寝られます。「この枕はキリストの腕か」なんて、そんなことを考えたってダメだ。キリストは舟板を神さまの枕として、申命記に

「永遠の腕かひな」

という言葉があるじゃないか。神さまの永遠の腕かひなに眠っているような人だよ、キリストは。至るところを枕にしている。枕するところを無き者は至るところを枕とする。

信仰なんてのは簡単なものなんです。あまりみんな考えすぎる。意識過剰だ。信仰がうすいのあついのなんて、そんなことは問題じゃない。自分の信仰になんか絶信しろと言う



んだ。

「信仰なんかありません」

とはつきり言ったらいい。

「あなたの信をいただきます」

というだけです。

「信仰とは神の業である」

とルターも言った。あの『ロマ書序文』の、「まことの信仰は……」という一節は素晴らしい一節です。

「必ず聖霊を伴う。善き業をするのしないのと考える前に既に善き業はなされてい
る」

と彼は言っている。信行一如の世界をルターも烈々と語った。

ところが、世の中には縁なき衆生がいるんだ。いくら私が白熱的に語っても、頭ばかりで聞いていてきつぱり受けとらない人がある。

「もうそれはやめてください。どうぞ仏教でも何でもいいですから。福音はあなた

に合いませんから」

なんて言ってしまうんだよ、僕は。はつきりそう言っちゃった。そして、本当に行き詰まって、「これはいかん」という時が、その人の時機になるんです。魂の世界はごまかしがききませんからね、どんなに他のものでごまかして代用を使っていたってダメなんです。魂は本ものにふれるまではダメ。そのかわり、本ものに触れたら、何がどうなってもいいということになるんです。

「かの人もし神より出でずば、何事をも為し能わず」

と。我々が——「私が」でいい——もしキリストから出なければ、何事もできない。しかし、キリストから出てくれば、エン・クリストならば、何でもできる。我々のスローガンは「エン・クリスト」なんだからね。「キリストの中にある」という現実なんだから。「これから入ります」じゃない、「エン・クリスト」という言葉は。

「キリストの中にある」

ということ。『エン・クリスト』というこのたった20頁の雑誌ですけれども、これは本当に伝道にもつと使ってください。お金のことなんかどうだっていいから。そして人を救ってくださいよ、皆さんね。まだバックナンバーはいろいろ余っていますから。どの号が人にどのような役に立つかわからないものな。私はカバンに入れて歩いている。「ああこの人にやろう」と思えば、やるんだ。

「読んでごらんなさい」

と。無駄になったっていいんだよ。それだけの気合をもってやってください。今はもう遠慮するときではないですから。そうかといって、押し入って何か折伏しやくふくするような、すごい



う意味で私は言っているではありませんよ。

●聖霊を受ける場は平伏しの場

34 かれら答えて『なんじ全く罪のうちに生まれながら、我らを教うるか』と
言いて、

はつきりそう言っているんだ。「盲人というのは罪のうちに生まれたから盲人なんだ。そのくせに、私たちを教えるか」なんて、もう旧約の硬化現象を起こしている、方程式でものを言っている。

遂に彼を追い出せり。

追い出されてしまった。

「お前は、安息日にすべからざることをしたやつによって目があいたってダメだ。

あれは罪びとなんだから」

と。それはキリストはついに「罪びとの首」となって十字架にかかりました。特にパリサイは、悔い改めなければ、地獄に落ちる。黙示録はそのことを語っている。

35 イエスその追い出されしことを聞き、彼に逢いて言い給う『なんじ人の子を信ずるか』

キリストは彼を発見して、

「お前は人の子を信ずるかね」

と。「人の子」というのは暗号的な言い方で、「メシヤ」ということです。ダニエル書に出てくる。「メシヤを信ずるか」と。

36 答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』

「誰だか知りませんが、信じたいものです」

なんて、相変わらずそんなことを言っているんだ。

37 イエス言い給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』

「その人の子を見たんだ、お前と語っているこの私だよ」

と。まあおもしろいね。絵描きだったら、この瞬間を書きたいものだ。

38 爰に、かれ『主よ、我は信ず』といて拜せり。

今度は本当に「主よ」と言った。「我信ず」というのは、

「あなたでしたか。もう信じざるを得ません。参りました!」

ということ。平伏してしまった。主には平伏す。降参して、「参りました!」と。全存在がキリストの前に平伏さないことには、いつまでたっても始まらない。聖霊を受ける場は平伏しの場なんです。

39 イエス言い給う『われ審判の為にこの世に来れり。』

はつきりと。黙示録にも出てきます。



見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん為なり』

これは素晴らしい言葉です、大変な言葉です。見えぬ人は見えて、見える人は見えなくなる。これが審判だと。見えると思っっているパリサイ人、これが見えなくなる。もともと見えると思っっているのが間違いだから、相変わらず見えないうことだけれども。ところが、一向分からん――この場合は具体的に肉眼の見えない人ですけれども――見えぬ人が見えるようになる。

「お前が見えるようになったことはその微なんだ。お前は、霊的な現実、真理の微だ」と。だから、

「神の栄光の顕れんためだ」

とキリストが言われたわけですよ。

我々はみんな目が見えています。ところが、肉眼の目ではない。霊眼を持っていたかとなると、霊眼は霊的盲者。我々は元来、霊的盲者なんです。いわゆる盲者であつてもそうでなくても、みんなこの霊的盲者です。キリストにでつくわすまでは、この霊眼が開かれない。開眼しない。霊的開眼をしない。これは聖霊を受けるまでは、御霊を受けるまでは。十字架でいかに盲者であることが分かるんです。暗黒の世界、罪の世界。

聖霊がくると開眼するわけです。この十字架は焦点だからね。生まれ変わる焦点だから、十字架は。闇から光の世界に変わる焦点です。光の世界は聖霊の世界。

「汝らは世の光なり」

というけれども、聖霊を受けなければ、光になりっこない。

●無の光

私は今度の『エン・クリスト』20号に「無の光」という題で独話対照を書いた。これは今までのソネットが一番最高の作品です。

「無の光」独話対照 ソネット 1984年8月4日 天韻

「この成否を顧みず、

できるかできないか、できたかできないか、そんなことは顧みない。

ただ仕事を愛する。

合格・不合格を乗り越えて、

ただ最善を尽くすのみ。

普通の試験であろうと、入学試験であろうと、何であろうと、最善を尽くして、落ちたら落ちたでいいじゃないかと。

競技の勝敗を念とせず、

何だい、あのオリンピックは。ただ何分何秒だとそんなことばかり考えている。それよりも「本当に立派に走ったか、立派に演技したか」と。あの金メダル、銀メダルの判断な



なんて訳がわからん。

ただ全存在で自己と戦つ。

「全存在で自分と戦え。相手は敵、競争相手ではないんだ」と。ことにマラソンなんかそうです。いろんなテクニクがあつたつてダメです。本当の意味では自分との戦いです。高校野球で「正々堂々と戦う」なんて言つて、敬遠なんかしやがったから、とんでもない。どんな優れたバッターであろうと、正面から向かつていかなければダメです。

投手と投球を凝視して、

ピッチャーの投球の姿で大体わかるんです、今度は何がくるか。もうプロとなれば、そこまで分かなければダメです。ところが、自分で予想するでしょ、この次はカーブがくるだろうか、スライダーがくるだろうかなんて。そして、予想しそなつて、せつかく直球で来たい球を逃したりね。まあ見ていると歯がゆくなるよ。私は王(元プロ野球選手、監督、王貞治)の代わりに監督になつてやるかと思うくらいだ。

全霊全身でかつ飛ばす。

その時の瞬間でパツと行けばいい。その点は外人のバッターはとにかく、これだと思つたらすぐ打つだろう。あれはいいね。ストライキがいくつだ、ボールがいくつだと、そんなことを計算しているバカはあるかというんだ。とにかく、初球であろうと何であろうと、これと思つたら、すぐ打たなければダメですよ。このピッチャーは大したことはないから死球を待つていようなんでダメだよ、そんなのは。もうそういうことは見ているとよく分かるんです、私は。何をやつているかと。

「神のためには狂えるなり」

とパウロが言つたが、とにかくこの召団の皆さんは、普通の人に

「ちよつとこれは気がちがつている」

と思われような——それぞれ何をしたつていいです。そういう質を、それだけの気魄をもつて生活していると、必ずどんどん力が来ますから——それを実践しなければ絶対にダメです。もう福音の世界は実践が大事なんです。道徳の世界だつてそうだけれども、霊的実践が一番大事なんです。やらないと。自分を鍛えなれば。鍛えるというのはそういう意味ですよ。御霊の力で鍛えることができるんです。楽しいんです、この鍛えは。でなければ、御霊は眠つてしまうよ、どこかへ行つてしまうよ。

このように何ごとも無私の存在で為せよ!

そのとき我れ無き我れが燃えるのだ。

こうして無即全が妙えに現する。

神なる源泉と一如なる

霊的な生と動と存在に於てこそ

「生と動と存在」というのは、



「生き動きまた在るなり」

とパウロのアレオパゴスの演説の中に出てくる言葉ですね(使徒行伝17・28)。

宇宙の無の光が現はれる。」(『エン・クリスト』第20号 1984年10月)

「無の光」なんて言ったって、普通は分からないだろうね、何のことだか。「ダス・リツヒト・デス・ニツヒツ」と書いた。ドイツ人だつて分からないんだ。まあエックハルトみたいな、ああいう神秘家なら分かってくれるけれども。ちゃんとソネットで韻を踏んでいる。この宇宙的な無の光の全的な体现者はキリストと釈迦であった。

● 決定的な瞬間を捕まえないければダメ

この盲人は目が開いたという、非常に次元的な飛躍をさせられた。彼はどれだけの信仰に入っただかは書いてない。けれども、

「われ汝を信する」

と彼は告白したから。

「あなたは律法を破つて、パリサイ人に罪びとと言われたけれども、とんでもない

話だ」

ということを率直にこの盲人は告白したわけだ。

「信ぜざるを得ません。あなたのその驚くべき愛の力に、霊の力に自分は圧倒され

ました」

ということだよ、「われ信ず」ということは。

とにかく、皆さんは今までの生涯で、あるいはこれからの生涯で、決定的な瞬間を捕まえないければダメです。この霊盲から霊明の世界に、霊の開いている世界に。それは何らかの具体的なことを通して聖霊をはつきりと受けとる。集会でぶつ倒れてもいいですよ。あるいは、一人で祈っていてガーツと来てもいいですよ。あるいは何か仕事をしていて、忽然として来るかもしれない。分からない、その人によつて。どういう時に神さまは聖霊をパツと光らせて中に入るか。一人びとりによつて体験の仕方はみんなそれぞれなんです。ひとつも人真似はいらん。そういう開眼をする。それは私は決定的と言います。

無教会の歴史ではまだそういうことがはつきりとは言われていなかった。塚本先生が病気になる前に——私が訪ねた時に——私にこう言ったよ。

「僕の伝道は本当は間違っていたよ。手島君と君のが本当だ。しつかりやってくれ」

と。これは本当ですよ。先生はそう言ったから。先生はそういう消息は分かるんです。そういうところは先生は正直だよ、内村先生も正直な人だ。藤井先生からはそういう言葉はもちろん聞かなかったけれども。まだ私は若かったしね。けれども、藤井先生は、

「小池君は今に素晴らしい雑誌を書くことになるよ」

と言った。



とにかく、この決定的な瞬間を捕まえては。召団の人たちは数は少ない。けれども、少ないだけ逆に質的に素晴らしくなってくれなければ困るよな。一騎当千でなければ。一騎当千のためには、決定的に聖霊を受けなかったらダメなんです。そうしたら、非常に活動的になる。創造的になる。もういわゆる今までの

「信仰によって義とされる」

なんて、そんなお題目を言っているような世界ではない。行き詰まれば逆に素晴らしくなる。艱難にあえば、悲しみにあえば、いろんなことのでつくわせば、裏切られれば——何でもいいよ——いよいよ素晴らしくなる。この聖霊の世界は絶対に行き詰まらない。行き詰まるどころのさわぎではない。

「艱難にあえばあうほど喜べ。聖霊が働くぞ」

とペテロも言っているではないですか。パウロもあれだけのさんざんな目にあつて、あれだけの艱難にあつて、聖霊の力でなくてどうして彼はあの大伝道ができたか。

疲れを知らない人になる。

「ああ今日は疲れた」

なんてことがなくなる。集会をすれば、語るも聴くも同じこと、御霊の世界がグングン展開していく。終りになればなるほど力が出てくる。ありがたくてしょうがない。塚本先生は、

「集会が終わると、月曜はもぬけのからみたいだ」

なんて言う。ダメだよ、塚本先生は。やはり、聖霊の世界からはズレていた。先生の話は、私は一回もつまらなかったと思つたことはない。けれども、なお一つのことを欠くというわけです。無教会は一つのことを欠いているんです。それは御霊です。私は悪口言われたつて、何と言われたつて、誤解されたつて、一向差し支えない。今に見てろと。ちゃんとそういうものがあるんだよ、私には。それは委ねられた、遣わされた使命を果たすまでは絶対にやりませんから。

そういう意味で本当に協力してくださいよ。一緒にキリストのためにやりますから。

40 パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言う『我らも盲目な

るか』⁴¹ イエス言い給う『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、然れ

ど見ゆと言う汝らの罪は遺れり』

見えると思つている文化人は実は霊盲なんです、文化文明人は。ところが、本当に聖霊をいただいているキリスト者たちが、第三次戦争をくい止めるくらいの気持でやっていかなくては何。気持は、くい止めるつもりでやらなくてはいかん。「どうせ来るよ」なんてはダメ。

「たとえ明日、世界が亡びても、私はリンゴの苗木を植えるよ」

という、ルターの言葉を今度の第七巻『聖書の人ルター』の口絵のところに書いたでしょ。神の国の種を播いて行かなくては。どうぞ、そういう光栄ある戦いを進めてください。一緒に行きましょう。この具体的な事実を通して。最悪は最善となりますから。終わります。

